

――――――――――――――――――――――――――――――

ほどぼしる精神の内景



カレル・アベルは、現代オランダを代表する画家、彫刻家で、1948年に前衛美術運動のグループ「コブラ」の創設に参加して戦後美術の原点として大きな影響をおよぼしました。展覧会は油彩画61点、彫刻・レリーフ12点、ドローイング20点によってアベル40余年の足跡をたどる日本で初めての本格的な回顧展です。子供の描く絵、原始美術や民俗芸術に触発されて、独自の表現主義的な作風を追求したアベル。あらゆる美学的な原理や形式主義を否定して、オランダ絵画の冷たい抽象の伝統をつきぬけて、ゴッホの革命的な精神を蘇らせたアベル。現代人の内奥にひそむ原始的な感情を、動物、鳥、子供などの生命感に富んだイメージにたくし、激しい筆触と鮮かな色彩によって表現した彼の息吹は、現代美術に初めて触れる人々、そして何よりも子供たちのために開かれています。

2月11日祝土—3月7日火 西武美術館

1月5日(木)～2月5日(金) 国立国際美術館(大阪)
主催=西武美術館／産経新聞社 後援=文化庁／オランダ大使館／国際文化交流協会 協賛=KLMオランダ航空／Heineken Beer 協力=フジテレビギャラリー 入場料=一般900円(800円)／大・高生700円(600円)／中・小生400円(300円) ※()内は前売・団体20名以上料金

思潮社 定価● 1,600円 ISBN4-7837-1506-8 C0010 ¥1600

思潮

柄谷行人
鈴木忠志

季刊思潮

1989 No.3

数学の思考をめぐつて

自己言及的、あるいは対角線的諸問題へ

森毅・倉田令一朗・浅田彰・市川浩・柄谷行人

†共同討議

思潮

1989 No.3 *〈数学の思考〉をめぐつて*

森毅・倉田令一朗

浅田彰

市川浩

柄谷行人

思潮社

十文藝季評
描くことの消滅

ライフル症候群——西田哲學

演出家とは何か

太田省吾・鈴木忠志

十對話

「評論作田監」橋爪大三郎・大澤真幸・赤坂薫雄・四方田大彦・渡部直己・益井素・宇佐美圭司・田中中央 「講話・大岡信」「インタビュー」「イントビュー」「アンソリマルティネ」「エッセイ」細川俊夫 「連載小説水村美苗」「繪明暗」

出来事としての治療 自分の先端に立ちつ世界に存在する

アンリ・マルディネ氏に聞く

聞き手 ピエール・シャラザック
ジョエル・ブーデリック

訳／橋宗吾

アンリ・マルディネ (Henri Maldiney) は、発生状態にある言葉を隠滅するものを全く信用せず、また、そういうものとしての散文に警戒を怠らない。尤もしい理論や概念に囚われることなく、自らの思想に関わり、それを基礎づけるものと、活発な応答を続けている。この哲学者が思考せざるを得ないもの、それは、現前と開かれた世界の様々な可能性ということである。

アンリ・マルディネは、一九一二年に生まれ、リヨン大学の文学及び人間科学部で、長きにわたって一般哲学、現象学の人間学、美学を教えた。が、彼の業績を紹介しようとすれば、制度化された範疇や題目を、どうしても越えないわけにはいかない。彼は、精神病、美術、神話及び詩の世界と取り組み、形の生命を見出した。これは、彼にとって啓示的な出来事であった。というのも、人間の実存と同一の構造を示していたからである。

彼が探求の過程で出会い、決定的な影響を受けた人物としては、まず、ニーチェ、ヘルダーリン、ハイデガー、フロイト、エルヴィン・ショトラウス (Erwin Straus) の名前を挙げておくべきだろう。また、彼とローラン・ト・クーン (Roland Kuhn) は、ビンスヴァンガーハーの思想を忠実に継承し、かつ、柔軟に応用している。さらには、L・ゾンディ (Leopold Szondi) の運命分析と、〈接触〉の次元——この語は、ゾンディがハンガリーの精神分析学者イムル・ヘルマンから借用し、基本的なベクトルの一つとして、自らの欲動理論に組み込んでいるものである——で、つながっていると言えるだろう。この〈接触〉の欲動を構成している基本的な運動 (つかむ ("しつかりする")) — 「放す (ぐつたりする)」、「再びつかむ ("再びしつかりする)」乃至は「何かを求めて出立す

る)」は、言語以前の次元に属しているのだが、アンリ・マルディネが、現存を基礎づける時空未分の行動を探し求め、それを見出したのも、この言語以前の次元においてなのだ。

また、例えば、先達で亡くなったピエール・タル・コアト (Pierre Tal-Coat) のような、現代の芸術家たちとの交友について、私たちは触れることができなかったが、マルディネが対話の中で示してくれたように、それは、美しい形との出会いであり、彼の思想にとって極めて重大なものなのである。なぜなら、美しい形と出会う度に、世界内存在と世界に閉かれていることについての問い合わせが生まれるのだから。

ピエール・シャラザック

他なるものの経験

——あなたが、リヨン大学で哲学を専攻している学生をヴィナティエ精神病院に連れて行って、精神病者に会わせたこと、これは様々な表現活動を営ませるためにですね、まず、そのことからお話しして頂きたいと思います。

マルディネ 第一の理由は、学生に関することなのですが、大学改革以後、私が実存現象、精神病者に直面すれば、こうした障害に出くわすことになるわけです。というのも、通じ合っていると思いかけた時でも、実際には精神患者がそっぽを向いているからです。

他人と通じ合っているとは軽々に思いますが、そんなときには軽々に思いますが、そもそも他人とはぶつかっていないのです。たいていの場合、他人のうちに、他人がすることに、自分が投射したあれこれの映像の反映しか見ていない。大学ではよく、こうした錯覚を起こすのですが、成人するまでの期間が延長されて、自分の理想像を先走って手に入れようとするため、自閉的な空想を育んでしまうのです。そこで、病人と接触を覚えることがないのです。しかし、ほんとうに自己を形成するためには、現実の瞬間に直に触れなければなりませんし、現実の障害

にぶつかなければなりません。心を閉ざし

さて、二番目の理由ですが、こちらは病人

自身に関することで、肝心なのは、病名とか、その他カルテか何かに書かれていることとか、そういう諸々の表象をとっぱらって、自分が一人の人間として何者かであることを、病人にもう一度確かめさせてやることなのです。なにしろ、本人は、そのような表象にしたがって、型にはまつた行動しかしないのです。ですから、もちろん、本人と言っても、正確には私たちが彼自身だと思っている人々のところですが、この人に働きかけることが必要だったのです。人間に共通の基盤から、この人を理解しようとすることが必要だったのです。ただし、この基盤にしても、通じ合ったという微かな感覚を手掛かりにして、今なお探し求めているわけですが。

もっとも、あなたは、ヴィナティエ病院に初めて連れて行った学生の中にいましたね。

そこで、そう、なかでもベルーが指導してい

た絵画室のある社会センターで、病人たちと接觸した。あなたが提出した年度末レポートのことは、今でもよく覚えてます。ある患者について書かれたもので、彼の問題、彼が自分では正確に表現できないけれど、事実、

彼自身がひっかかっている問題を見事に明らかにしていました。この患者は、花を描くわけですが、そのたびに必ず、雌しづと雄しづのある、花の中心は白く残しておく。

そして、あなたのレポートによれば、普通彼はここで、描いていた絵をうつやつて窓際へ行き煙草を喫り、それから戻って来て絵を完成させる。筆を進めて来た末に、絵に空白が残っている瞬間を、彼は選び取り、世界へと聞かれた空日に向かうように、窓際へ行った。当の世界とは打ち解けて通い合ってないにもかかわらず。しかし、彼はこの開口で、つまり、窓のところで、少なくとも花を描いていたとき自分のものにしていた一種の方向感覚に完全に対応する。強度の方向感覚を持っているのです。絵を仕上げようと決意する、その決意の瞬間、彼は一体何者だったのでしょうか。答えるのは難しい。彼はずっとやべらないからです。とにかく見てとれるのは、ほのかに「骨子」だけでも示されている花の絵と、自己描写との間に何らかの

関係があるということです。けれども、最も重要な点として、最も重要な意味をもつて

いるとは思っていますが、それは、あの患者が花の真ん中を空っぽのままにしておくことによって、自己ディッサン用の空白を呼び求めていたのではないか、ということです。彼の描いた数々の絵は見事なもので、ベルーは本当に感じていました。彼の絵が美しいのは、ある現実を、現実の彼自身を描き出しているからです。一步を踏み出せないでいるのにもかかわらず、踏み出そうとしている彼自身が描かれているからです。

——この患者が現実の自分自身を描き出せたのは、ベルーが絵の先生として、そこにいたためでもあるのではないでしょうか。しかし、ベルーはこの患者にたばこをやって、一連の動きに加わっているのですから。

マルディネ、もちろんそうです。その点について言えば、実にベルーはこうした芸術療法の場には願ってもない人物です。そう、ベルーヴィエ医師がこう言いました。「ベルーは、かれこれ二十年も、このヴァナティエで絵を教えてくれるわけだが、驚いたことに、精神病院で働いているのに気が付いていないみたいだ。」というのも、ベルーは、教えてくれる人たちが人間だとして接していたからですし、

この人たちの方でも、人間として遇されている彼自身が描かれているからです。

——ベルーと同様、学生たちも外から病院にやってきて、精神病者の実態に出くわすわけですが、患者のほうからは、これは一大事件なのです。

マルディネ、しかもそれは、バルヴェが十分心得ていたことで、学生たちを受け入れた理由なのです。事実、病院内部のものは皆、精神病が作り上げた世界の一部を成しており、院で働いているのに気が付いていないみたいだ」というのも、ベルーは、教えてくれる人たちが人間だとして接していたからですし、

——ベルーと同様、学生たちも外から病院にやってきて、精神病者の実態に出くわすわけですが、患者のほうからは、これは一大事件なのです。こんなあり様ですから、一から十まで外部に属しているものも、同じく役には立

ちません。道をつけるには、言うなれば、内と外の境目にいるものが必要なのです。つまり、精神病者のあり方、とりわけ分裂病者のあり方に、つながりのあるものが必要なのです。なぜなら、精神病者というものは、自分自身とともに他とも同じ理由によることで、実際、人間は誰で、自己に疎遠な領分を手渡して、自己に固有の領分を入れ、また逆に、固有の領分を手渡して、疎遠な領分を入れるので。二つの領分は、絶え間なく交換され、交差配列をなしているときさえ言えるでしょう。これは広く、内部と外部の問題一般について言えることです。内部と外部は、主体の一切関与しない空間にあらかじめ設定された領域ではなく、二つの極をもった遊びの場なのです。患者と芸術治療者が接しているときに、活性化されるのは、いや、生み出されると言ってもいいでしょう、それこそまさしく、この遊びの場なのです。遊びの場は、患者と芸術治療者の道行にともなうものです。が、またある意味では、彼らの方が遊びの場の動向につきしたがっていくとも言えるのです。

私は、この後の方から始めたのですが、ミニスター・ランゲンの精神病院で、ジャック・スコットに立ち会ってもらって、ローラン・ト・クーンと一緒にやってみたのです。そこには一人の分裂病者で、これまで外界にいたのは一人の分裂病者で、これまで外界

作り出して行けば、精神病者は、自閉の世界の反復を断ち切れるかもしれないし、また同時に、他人とは何かを経験できるかもしれないのですね。それも、言葉では、私たちの方からも患者の方からも接触できないときには、しかし、美の経験を通して生まれるこの出会いには、限界あります。つまり、それでは治療効果がないという。そこで、治療を進めて行くためには、接点があらうるの

と、この交流を完全に断つて、十七歳のときには病院に入れられたまま、口を利用していませんでした。ところが、この患者が絵の複製、ことにルノワール晩年の『水浴びする女たち』の一枚を前にして、反応を示したのです。一本の紐を弄びながら、こう言いました。*die goldene Sonne des Lebens* すなわち、「生きている、金色の太陽」と。同じくセザンヌやゴッホの絵を見て、口にした言葉もビントをはずさず、しかも、はつとさせられる表現でした。このとき確かに、何か驚いたことが起っていたのです。クーンは主治医だったのですが、「生きている、金色の太陽」というあの答えの後、呼ばれて出て行きました。その瞬間、患者は突然立ち上ると、「どなたの番でしょうか」と言いました。彼は以前、ローザンヌで理髪師の見習いをしていました。だから、クーンが出て行く姿を見て、長い間忘れていたイメージ——出て行く客に代わって別の客が席に着くという、見習いにとっては重要なイメージが、こみあげてきたのです。クーンはこの患者のことよく知っていたのですが、こんなことが起こる確率はほとんどゼロに等しいと

——いろんな形に出会って、思い思いの形で、いたのは一人の分裂病者で、これまで外界

芸術療法の二つの経験

りと目をやるだけで、他に何もしようとはしなかったのです。

なのに、その彼が動かされた、ルノワール等の作品を見て動かされたのです。もっと実験に参加させるために、クーンは他の患者ではなく彼を選びました。それは、この患者に、形や色、そして特定するのを避けるなら、ある種の絵画作品にたいする感受性が備わっていることに気づいたからです。この患者は、一方では、黙りこくったまま、窺い知れない集中状態の中で、ただ毎日を送っており、他方では、時折、感受性のあるところを見せる。言うなれば、この両者の間で潜在的に分割されていたわけです。ところが、いまや分割線が断ち切られてしまつたのも、一瞬、彼は過去のある時点に入り込んでいたからです。これは、たんに想起作用だけの問題ではなく、回想の次元も考えに入れなければなりません。といっても、まず両者の違いを明確にしておく必要がありましたが、過去から現在へと達するの想起であるのに対して、回想では現在から出発して過去へと至ります。この患者の場合、この二つが組み合わさって現れたようと思えます。どうやら、昔いた理髪店のことを思い出したのは、クーンが実際に今、出て行くところを見たからなのです。

して下からやつて来て、絶えず思い出されて、いる、と。では、どのようにしてか。この問い合わせに答えるには、*sens* という語の意味について考える必要があるでしょう。すでにハーゲルが、*sens* とは奇妙な語だ、それ自体にも、全く異なった、二つの意味がある、と言っていますが、一方は、意味、つまり概念です。もう一方は、感覺領域のこと、感覺活動や感覺器官について言う場合です。ところが、*sens* には、はるかに重要な、三番目の意味があつて、方向が、それなのであります。この、方向としての *sens* について、エルヴィン・ショトラウスが、*sens* の意味について(Vom Sinn der Sinne) の中で、見事に分析しており、感じることと動くことの隠れた連接関係を取り出すことに成功しています。動くことというのは、私が方向としての *sens* と名付けた、*sens* の意味に相当しております、また、感じることは、感覚見事に分析しております。この、方向としての *sens* については、後者の意味にも注目しなければなりません。どうもの、意味と感覚は、隔壁によってつながりを断たれているわけではないですから、が、やはり重要なのは、方向としての *sens* で、時空未分の行動に対応しており、実際に、様々な形の動きとは切り離せないのです。

この、形の動きというのは、様々な形を構成する自己運動のことです。緊張、と言いうか、感覺強度のことを考えてもらいたいのですが、それに応じて、形は生まれ、自分自身の道を拓くのです。これは、形が生形を放つための条件で、それ以外の形は骸骨にすぎません。要するに、形を構成するのは、リズムなのです。

それに、行き着くところ單なる映像に過ぎないといった、物をただ再現しただけの平板な具象作品が、とりわけ精神病患者に強く働きかけたためではなく、働きかけるのは必ず、本当の意味での形、言い換えれば、運動を生み出す時間と空間を、何らかの点で創出している作品なのです。形にはそれぞれ、その形に特有の、運動を生み出す作用(=「發動性」)がありますが、最も優れた作品の場合、この作用によってリズムが生み出されているのです。ところで、人間が形と共に鳴り合って活発さ(=「發動性」)を取り戻す以上、形には潜勢力がある、と考えられます。では、活発を取り戻すことは、一体どうしたことなのでしょうか。それは、もろもろの抑止が取り除かれなくなる、ということです。治療効果を問題にするなら、ここにこそ、芸術的な形の効力が表れています。そして、このことは、たとえ東の間にせよ、患者が意識を取り戻す

後に、より軽度の患者を何人か相手に、同様の実験をしてみました。ある分裂病者と話している最中に、クーンは、鳥が二羽飛んでいるところを描いたタル・コアトのリトグラフを二枚見せたのです。描かれているのは、飛翔であつて鳥ではありません。黒い筆の跡が不連続のまま、だからこそ空白の力を喚起して結びついている、そんな作品なのです。

この作品を見るなり、患者はクーンと話し始めた。それも、こいつは自分がよく知つてゐるあの病人なのか、とクーンがいぶかしむほどで、実に二時間のあいだといふもの、完全に明瞭で的確な話しぶりでした。

方向としての *(sens)*

これは、世間一般へと通じる窓口が本当に開かれたしるしだ、とお考えですか。マルディネ 確かに世間へと通じる窓口は開かれていました。しかし、今はまだ、答えるべきではないのです。それは、世間という概念に幾つかの意味があるからなのです。あなたが二番目の問題として挙げたのは、様々な形を作ることについてです。実際、患者たちは促されて、あるいは自らすんで絵を描いており、その数はかなりのものです。なにしろ今や、精神病の文学といったものができないくらいですし、本当に記録を試みたもの

も幾つか生まれていますから。

ここで考えるべき問題は、何故どれもが、言語形式ではなく造形形式に対する反応なのですか、ということです。あなたがさっき言ったとおり、重度の患者の場合、絵には反応しますが、言葉に対しては同じように反応しません。それは、造形形式によって呼び出される構造はすべて、言語のどの構造よりも、原始的で基礎的な構造だからです。その証拠に、言語の構造はどれも、原始的な構造から生まれたものです。説明しましょう。語の起源を明らかにしようとして、語源学を使って語基のゾーンを越え、語根のゾーンに達してみると、非常に多くの原始的な語根が出てくるますが、こうした語根は最も重要なもので、時空分節以前の様々な行動に対応しています。そして、これらの行動こそ、人間が世界に存在する際の、最初のヴェクトルなのです。人は、時空にわたる様々な行動を通して自己を意味づけ、自分の世界を決定して行きますが、だから、人間が、未分の時空と空間に分節したということは、語の層の下に、それ以前の意味の層があることを示しているわけでも、しかも、この意味の層は、語の層が消滅しても、持続して行くのです。この下部の層については、次のように言えるのです。すなわち、言語表現では、この層が、支えと

に、言葉について言えるのは、原始的な構造がほとんど残っていないということです。それでも、そこから養分を得ておおかたが、私たちは話したり書いたりできるわけですが、この原始的な構造にもう一度生命を吹き込み活動させることができるのは、詩人だけなのです。また、数ある言語(『国語』)の中には比較的、行動につながりやすい言語があることも、考えておく必要があるでしょう。例えば中国語の場合、単語には、象徴としての側面があり、行動を促すわけですが、その影響というものは混乱であり、動搖であつて、目の前の事象をもう少し細かく検討しないといつた、物をただ再現しただけの平板な具象作品が、とりわけ精神病患者に強く働きかけたためではなく、働きかけるのは必ず、本当の意味での形、言い換えれば、運動を生み出す時間と空間を、何らかの点で創出している作品なのです。形にはそれぞれ、その形に特有の、運動を生み出す作用(=「發動性」)がありますが、最も優れた作品の場合、この作用によってリズムが生み出されているのです。ところで、人間が形と共に鳴り合って活発さ(=「發動性」)を取り戻す以上、形には潜勢力がある、と考えられます。では、活発を取り戻すことは、一体どうしたことなのでしょうか。それは、もろもろの抑止が取り除かれなくなる、ということです。治療効果を問題にするなら、ここにこそ、芸術的な形の効力を完全に理解していましたが。

抵抗の壁盤・他人の秘密

——それでは、自閉的な行動や世界がそのまま

ま進展して行つたときに生じる危険について

は、どのようにお考えなのでしょうか。まさしく、この対話の冒頭から強調なさっていた危険に他なりませんが。

マルディネ それには三つの側面を区別しなければなりません。まず、活発さ（＝発動性）は、それ 자체では自閉的なものではありません。これに対して、言葉は共通のものであり、発言に際しては、多くの意味が共有されなければなりません。また、活発さ（＝発動性）を通じて結び付いているわけです。しかし、こうした言葉による共通性に慣れてしまふことで、それが全く当たり前にことに過ぎなくなり、ついには、あらゆる習慣の例に漏れず、言葉も実効を失つてしまうのです。だから、患者には、周囲の人々から離れること、時として、どうしても必要になることと同じく、実際ににはつながりのない、どんな集団、言葉から離れることも、火急を要する場合があるのです。それも、周囲の人々の言葉からだけではありません。言葉は交わされていても、実際にはつながりのない、どんな集団の言葉からも離れなければならないのであります。ところで、幾種もの出会いのうちには、活気のある（＝発動的な）出会いがあります。

そこで確かに、共同作業の名に値する事などは皆、活気のあるものです。しかし、必ずしもそこに出合いがあるとは限らないのです。それをハイデガーは「土」と名づけているのですが、芸術では、この基盤を、それ自身であるがままに現すには、まさしく現れることに反対するもの、つまり、それ自身のうちに引きこもり、閉じこもって、離れようとするもの、これを現さなければならぬのです。これこそ、眞のコミュニケーションが孕む逆説なのです。コミュニケーションを本当に成り立たせるためには、一方で、他人が自分のうちに閉じこもるのを認めなければなりませんし、しかし他方では、その他人が自ら現れて来るようにならなければなりません。精神病患者との関係で問題になった身体表現も、人ととのコミュニケーションといふ極めて一般的な問題に属する、一ケースな

す。それでは、活気があって、しかも、そこには出会いがあるとは、どういうことなのでしょうか。それは、互いに浸透し、かつ、対立し合っている者どうしの活発さのことなのであります。交流のあるところには、それに代わって断絶が、断絶のあるところには、それに代わって交流が、常に必要なのです。しかもこれは、ウニコットが様々な母子関係を取り上げてはっきりと述べていることでもあるのです。

このことはヴィナティエでは、きりと分かっています。三人の学生が身体表現を試すつもりでグループをつくって、患者とゲームをしました。例えば、木と風のゲームでは、風が木にあたると、木がそれにしたがってゆらゆらと揺れる、という具合です。ところが、数カ月後、全く成果が得られなかつたと言います。だから私は、ゲームの中で日々と相手の意を迎えるのを止めるよう指導しました。パートナーがそれぞれ、相手に従う代わりに、つまり、相手の身振りやテンポに順に調子を合わせるのは止めにして、相手に対し抵抗を合わせるのは止めにして、相手に対しましんでしまはずに、風に逆らうのです。そうしないと、お互いに他人だということが分らないのです。あなたがさつき、他性の概念から触れたのも尤もなことで、これは根本的な概念なのです。

患者が自分を超えるようにすること

——形を作るためには必ず自分を超えないなければならないのでしょうか。ジゼラ・パンコヴは患者の作品を指すときには単に「幻影」と言う言葉を使っていますが、このように品にも超出の契機を認められるのです。確かに芸術作品ではないのですが、形あるものにするためには同じく素材が必要なのですから。

マルディネ 極めて重要な点を指摘しておき

盤で、これをハイデガーは「土」と名づけているわけですが、芸術では、この基盤を、それ自身であるがままに現すには、まさしく現れることに反対するもの、つまり、それ自身のうちに引きこもり、閉じこもって、離れようとするもの、これを現さなければならぬのです。これこそ、眞のコミュニケーションが孕む逆説なのです。コミュニケーションを本当に成り立たせるためには、一方で、他人が自分のうちに閉じこもるのを認めなければなりませんし、しかし他方では、その他人が自ら現れて来るようにならなければなりません。精神病患者との関係で問題になった身体表現も、人ととのコミュニケーションといふ極めて一般的な問題に属する、一ケースな

ましょう。患者は絵を描いているとき、たいへい素材には関心を示しません。順序立てて、絵の性格や色に注意を向けてやれば、そのときはまた別で、色や絵の具が実際には、患者のあり方の一部になるのですが。だから、芸術家が、素材の様々な性質、言い換えれば、もうろの抵抗に敏感なのに対する、患者の方はそうではないのです。よく覚えているのですが、ヴィナティエのある女性患者が、絵を描く前に私にこう言つたのです。「あら、私、これから描くもの、よく知ってるわよ」。彼女は開始の合図を待つていました。そして一分半後には、頭の中には物を、しかも思つていたとおりの色で仕上げてしまいました。彼女は一步も進まず、何も変わらなかつたのです。以上が第一の点です。つまり、素材からの抵抗が全然感じられず、意のままになるようはだめなのです。まずまちがいなく、患者は、きりと示してやるべきなのは、このことです。この抵抗が患者にわかるようにしてやるべきなのです。二番目の点について言うなら、ジゼラ・パンコヴは、意のままになるようはだめなのです。コヴは芸術作品を作らせているのではなく、單なる粘土像を作らせているのです。そして事実、彼女はこれを幻影と呼んでいます。なぜなら、患者が実際に自分自身の方向感覚にしたがつて制作しているからで、しかも、こ

いかないからです。

——とすれば、患者に、芸術の分野で何かする手段を提供するだけでは、不十分なわけです。こうした実験には、自分のしていることが当たり前になってしまって、その結果、自分の置かれた状況が一回限りの特異なものだ、ということを忘れてしまった、それがあります。

マルディネ 前にも言ったように、その危険とは即ち自閉的な行動のことです。事実、芸術は自閉症と、特別な親近関係にあるのであります。「たとえば、世界が消滅しても、音楽が鳴り止まない、そんなことがあるかもしれない。なぜなら、音楽は、世界に劣らず直接的な、意欲の表れなのだから」とはショーペンハウバーの言葉ですが、もちろん、個別の意欲の一つが問題なのではなく、「生きたい」という普遍的な意欲のことと言っているのです。そして、自閉症の子供の多くは、音楽にたいする感受性をもっています。また、例えばリヨンの心理学者がドリニーのコミニティー・エリアで撮った映画でも確かにありますように、自閉症の子供は、ある種の運動——変奏を通じて反復する傾向にある連続運動、おおさっぱり言うなら、リズムを装つているものすべてに敏感なのです。けれども、これは本当のリズムではありません。何しろ

リズムとは反復しないのですから。それでも、次のようなことがあります。これらは運動は、出口のない完全に内閉的な型に則って、相互に連結されます。けれども、単なる容器ではない、流動的な空間を保つのであります。ルートヴィヒ・ビンスヴァンガーやマニエリスムを論じて、分裂病に特有の行き詰った実存の形をしています。けれども、單なが、そのマニエリスムでもまだ、完全に内閉的な型が出来ているのです。マニエリスムの本質とはボーズですが、病人は、閉鎖空間に自閉じこもって、ボーズを取り、そのボーズを保ちます。病人は、自分自身という人物を演じる俳優であると同時に、俳優を事とする人物なのです。これによって分かるのは、病人には、世界に向かって自分を超えることができない、ということです。超出に頓挫を来て、両義的な状態に陥っているのです。けれども、自閉症の子供とは違って、こいつの病人は自らを客体化して、表出された自分を自らの前方に据えるのです。

美術と形容される、数多の活動には、自閉的側面が確かにあります。芸術家としての資質はさておき、芸術家と見なされている者から自称芸術家に至るまで、引っ張めて言う

ことなどは、失ってしまいます。治療が円滑に運ぶようにというわけです。そして、おそらく、このようなやり方は、人間の活動を活動の範囲に留まって、断絶と超出の機会をもつことなく、失ってしまうのです。治療が円滑に運ぶようにというわけです。そして、おそらく、このようなやり方は、人間の活動を活動の範囲に留まって、断絶と超出の機会をもつことなく、失ってしまうのです。

出来事としての治療

——どんな治療をするにしても必ず、二つの間に身を置くことになります。すなはち、一方では、物事を制度の枠内に押し込んで、事件が起こらないようにしてしまって、他方では、全く自發的に、と言うか、突発的に事件が起ります。例えば、突然もないやたら、極めて多くの者が自閉的な行為に耽つ

と、それを患者の一件書類の中にしまい込んでしまう。2年後、その中から同じく密拍子もないやり方で、当のデッサンを再発見するといつた具合に。が、言葉の問題題に困りたいと思います。まず、実際のところ、創作中の患者を前にしたとき、治療者もまた抑止状態になります。と云ふが、今日では、化け物じみた創造を通じて、制度化された言説という考へが浮かび上がってきました。これは、言葉と言語を混交し、破壊するものです。どこへ行くの通じて、制度化された言説といふ考へは、この隣たりに橋を渡そうという試みだからです。そこで、言葉について、その必要性について、どのようにお考えでしょうか。いや、それだけではなく、患者の絵やデッサンを解釈する際の閉鎖性についてはどうでしょうか。

マルディネ このところ、やたらに言説という語が口にされていますが、誤ってこの名で呼ばれているものから、言葉（發言行為）というものを区別する必要があるでしょう。正しくは、言説が言葉を含んでいるのであって、対立させるべき筋合いのものではないのです。その理由を明らかにしておきましょう。それは、言葉とはおよそ反復も予見も不可能な、一瞬一瞬の事柄だということです。ギュスターヴ・ギヨームによつては、つきうど論

繰り返せないと、まさしく出来事だといふことです。言い換えるなら、一つ一つの出来事は単独に起こります。だから、たんなる結果に過ぎないものは出来事の名に値しません。何も起らなかつたといふことです。出来事は必ず断絶によつてたらされます。もちろん、医学にも言説があり、治療に関わる場合もあるはずですが、おそらく、この言説から成つていて、こうした言葉では、何かを問題にしているのはうわただけで、あらかじめ解答が用意されているのです。もちろん、医学にも言説があり、治療に従事する者たちは耳にするものの大半は、制度化された言説です。たゞ、既製の言説から成つていて、こうした言葉をきつかけにして、自分のうちで突然何かが発けるのです。このような出来事は患者に鎮が断ち切られ、出来事が生じるのです。こそ、治療者を激しく揺さぶるものなのであります。例えば、患者と話している最中、ある言葉をきつかけにして、自分のうちで突然何かが発けるのです。この出来事は必ず断絶によつてたらされます。この点で、他性出来事、実存、言葉は、堅く結ばれているのです。つまり、このようないいふ言説は皆、ハイデガーの言葉をややべり（Gerede）に帰着します。つまり、この言説が言葉から成つていて、この言説と同じく制度化されているのです。すなはち、馴れ合ひの言説なのです。分野を問わず、このような言説は皆、ハイデガーの言記と所記の関係のみ限定して、指示対象

であります。この点で、この言説は部分ならないけれど、ただ、話しているといふことは分かれています。この見受けられますが、このような態度の行き着くところ、言葉はますます閉鎖的になり、出来事に限定して、指示対象を置けるよう場所を開放してやるのです。出来事はいつも意外な出来事が起つた際には、患者が身を置くことになります。この点で、他性出来事、実存、言葉は、堅く結ばれているのです。つまり、この出来事は必ず一つの出来事なのです。もちろん、治療には一定の規則があって、その規則のお

面には目を向けることができます。けれども、こうした規則には治療を規制する働きしかありません。治療態度そのものを構成することはできないのです。そんな理由で、治療関係は、関係そのものをその都度作り出せる人のみが取り結ぶる関係の一つだと思います。そして、このような場所でこそ、患者は自分自身が治療者に現前しているのを感じることができます。

出来事がなければ、危機がなければ、真の治療とは言えないのですか。

マルディネ危機とは、人間が、実存するか、それとも消え去るかを決する瞬間のことです。ところが、精神病者は危機を経験しません。一度だけ経験した危機が原因となつて発病し、それ以後ずっと同じ危機を繰り返しているのです。したがって、現実の危機を——最初の危機の反復ではなく、別の危機を引き起こすことが問題なのです。そこで、病院で精神安定剤が濫用されているのは、どういうことなのかも考えても見て下さい。実際、精神安定剤によって皆、平静になるのです。しかし、そのせいで、危機が取除かれ、同時に、治療の機会、きっかけ、〈Kairos〉を取り除かれてしまうのです。

態から区別することができるのです。ちなみに、前者は出現の試みを、後者は沈潜の新たな段階を表しています。精神療法に当たる治療者は、恒常的な資質として、実地の経験をかなり積んでいる必要があると同時に、機動に対応できるよう、他者にたいする開放性と関連を備えていなければなりません。これは必ず行き当たる根本的な問題です。ある人の個人的な境遇、個々別の状況に関わっているのだということを絶えず自覚しながら養われたものでなければ、精神医学の知識は無等しいのです。ある病人を他の病人と取り替えることはできないのですから。これはあらゆる芸術療法について言えることです。私がサン・ジャン・ド・デュー病院で会った二人の看護婦は、患者たちが絵やデッサンを描いていたのを實に丹念に、しかも、極めて持続的なやり方で、見守っていました。例えば、このデッサンはこんな状況で描かれたとか、そのとき患者はこんな様子だったとか、その前乃至は後に患者が泣いたとか、ちゃんと知っているのです。その上、この二人の看護婦が患者たちに接するのは、アトリエの内側だけではありません。あらゆることが統合されて、全体として実存の弁証法をしていました。これは必要なことだと思います。

が、言葉の問題なのでしょうか。ある患者のかげで、ミスを犯さずにすみ、特徴のある側面には目を向けることができます。けれども、こうした規則には治療を規制する働きしかありません。治療態度そのものを構成することはできないのです。そんな理由で、治療関係は、関係そのものをその都度作り出せる人のみが取り結ぶる関係の一つだと思いま

す。そして、このような場所でこそ、患者は自分自身が治療者に現前しているのを感じることができます。

出来事がなければ、危機がなければ、真の治療とは言えないのですか。

マルディネ危機とは、人間が、実存するか、それとも消え去るかを決する瞬間のことです。ところが、精神病者は危機を経験しません。一度だけ経験した危機が原因となつて発病し、それ以後ずっと同じ危機を繰り返しているのです。したがって、現実の危機を——最初の危機の反復ではなく、別の危機を引き起こすことが問題なのです。そこで、病院で精神安定剤が濫用されているのは、どういうことなのかも考えても見て下さい。実際、精神安定剤によって皆、平静になるのです。しかし、そのせいで、危機が取除かれ、同時に、治療の機会、きっかけ、〈Kairos〉を取り除かれてしまうのです。

——この場合にも、先ほどのローラント・クーンの分裂法患者の場合と同様、言葉の中で、出来事が起こっているのですね。

私はこう言つてみました。「この下に何かがあるんですね」「はい」と彼女は答えました。この患者——来る日も来る日も、日がな一日押し黙つてしまふ、決して口を利かなかつたこの患者が、話し始め、それが数週間続いたのです。私はそれ以上そこにいかなかったので、これ以上のことは知りません。が、多分、好機を逸してしまつたのです。

抑止現象の意味と鑑み

——この場合には、先ほどのローラント・クーンの分裂法患者の場合と同様、言葉の中で、出来事が起こっているのですね。

私はこう言つてみました。「この下に何かがあるんですね」「はい」と彼女は答えました。この患者——来る日も来る日も、日がな一日押し黙つてしまふ、決して口を利かなかつたこの患者が、話し始め、それが数週間続いたのです。私はそれ以上そこにいかなかったので、これ以上のことは知りません。が、多分、好機を逸してしまつたのです。

もくじにされたのです。そこで、ブルーター医師は尋ねました。〈Was ist Auseinandersetzung?〉(お互に自分の「考え方」を開いて行くために、治療や看護に当たる人には、様々な情動が噴き出して来るのを許容しなければなりません。これは肝腎な点だと思います。なにしろ、普段から患者の周りにいた人達は、湧き出して来る情動に耐えられず、一緒に暮らして行けなくなつて、病院に連れて来たのですから)。

マルディネけれども、危機という言葉を使うときには、ゾンディの言う意味での発作の時期と混同しないよう、気を付けることも大切です。危機は必ずしも、〈てんかん性〉(ヒステリー性)の二因子からなる(発作(=シヨック))ヴェクトルだけに結び付いているのではなく、(接触)ヴェクトルや(自我)ヴェクトルに属していることもあります。私が思うには、〈自我〉ヴェクトルの領域に危機が生じたときこそ、最も危険であり、おそらくは最も効果的なです。危険のあるところ、救いの道も開けているのです。思い出すのは、こうした転機の一つをブルーター医師が取り上げたことです。彼は數ヵ月来、何の成果も得られないまま、一人の分裂病者と話をしていたのですが、ある時ふと、*einanderpersprechen* (「お互いに自分「の考え方を開陳し合う」)という語が、どちらからとも

ことを覚えています。彼女は絵を描きあげるところ、今度はその絵に色を塗りたくなり、全部覆い隠してしまふのです。毎回そうしていたのですが、ちょうどその場に居合わせたとき、私はこう言つてみました。「この下に何かがあるんですね」「はい」と彼女は答えました。この患者——来る日も来る日も、日がな一日押し黙つてしまふ、決して口を利かなかつたこの患者が、話し始め、それが数週間続いたのです。私はそれ以上そこにいかなかったので、これ以上のことは知りません。が、多分、好機を逸してしまつたのです。

——この場合にも、先ほどのローラント・クーンの分裂法患者の場合と同様、言葉の中で、出来事が起こっているのですね。

マルディネええ、確かに。ですが、どういふ具合にして口を開いたのでしょうか。一方では、絵を見たことが、他方では、絵を描いたことが、その条件になつてゐるのです。もちろん、言葉の重要性を否定するつもりはありません。が、さらに、その言葉にしても、何らかの行為によつてもたらされた事態に見合つよう、調整されていなければなりません。これは、ちょっとしたことに違ひのないのです。が、冷感な挙もあるのです。また、こうし

る妥協のあり方や、さらに別のあり方についても同様です。さて、対立するものすべてについて、同時にその両方でありたいと望み、しかも、この欲望を否定する。このようにして成立している自己の場合、突然自擲する危険にさらされています。そこで患者は、完全に活動を停止してしまうのです。

——けれども、抑止は防衛の一形態もあるわけです。

マルディネ もちろん、その通りです。なにしろ、インフレーション以上に危険なものはありませんから。インフレーションとは、破裂であり、解体であり、崩壊なのです。ゾンディは言っています。何らかの活動乃至は作業によってインフレーションを統合しなければ、すなわち、彼の言う向動性の次元——概念あるいは否定——がインフレーションに対応していないければ、インフレーションの結果、発狂することになる。しかし、否定することも挫折を示しているのです。というのも、否定することによってインフレーションを防いだとしても、そのせいで、活動能力が阻害され、麻痺てしまつて、実際に運用することが出来なくなるからです。

【自分の外へ向かう姿勢】

——患者がおのずから心を開くような条件が

で、施療者が患者の活動に立ち入ることで、この欠如を補わなければなりません。また、グループ作品つまり、共通の目標を目指しているのではないせよ、大なり小なり同じ方向に沿った行為が「まとまり」になっているような作品が、絵画はあるとしても、粘土細工にはあり得ません。一人人が自分の粘土像に没入しているのですから。だから、「自分以外へ」ということを否応無しに呼び覚ます中心「人物」が必要なのです。そして、結局のところ、ここに問題があるのです。すなわち、本来の意味での「現存」つまり、「自分の先端に立つ姿勢」を実現することが問題なのです。一般的に言って、精神病者はこれまで、実存とは本来、「自分の外へ向かう姿勢」を意味していますが、患者がこの「自分の外へ」と向かうように、ただし、それが自分自身の尖端に立つことであるようにする、これが治療的根本的な企図なのです。言い換えるなら、他人を内閉状態から引つ張り出して、世界に存在する(「世界内存在」)ということなのです。世界に存在するために自分の外に出てしまう(「自分ではなくなる」)のではなく、

自分でありますから世界に存在する。ここに課題があります。

舞踏は、様式化された身体表現だと言えるでしょう。ここで重要なのは、身体表現や踊ることによって、踊手ないしは表現者が自分の外へ身をさらすことになるという問題があります。

舞踏は、身体表現の問題です。もちろん、どんな舞踏でもそういうふうな問題があります。もちろん、どんぐりの形を取っているにもかかわらず、その意味での「現存」つまり、「自分の外へ」ということを否応無しに呼び覚ます中心「人物」が必要なのです。そして、結局のところ、ここに問題があるのです。すなわち、本来の意味での「現存」つまり、「自分の先端に立つ姿勢」を実現することが問題なのです。一般的に言って、精神病者はこれまで、実存とは本来、「自分の外へ向かう姿勢」を意味していますが、患者がこの「自分の外へ」と向かうように、ただし、それが自分自身の尖端に立つことであるようにする、これが治療的根本的な企図なのです。言い換えるなら、他人を内閉状態から引つ張り出して、世界に存在する(「世界内存在」)ということなのです。世界に存在するために自分の外に出てしまう(「自分ではなくなる」)のではなく、

具体的につかめるよう、幾つかの表現技法についてもう少し詳しく話していただけますか。

マルディネ まず、絵画に関して言えば、以前にも繰り返し教えたことなのですが、絵やデッサンを描かせる際に、紙を机に置いては駄目で、壁に張るか留めるかなくてはなりません。これは、描いている人と紙の間に、

一種の往復運動が生じるので、机の上にかがみ込んで、閉じた姿勢をするのですが、これは自閉症の前触れなので

す。これに対して、紙を壁に留めた場合には、前進したり、後退したり、からだ全体で、そこに閉じこもってしまうからです。つまり、机の上にかがみ込んで、閉じた姿勢をするのですが、これは自閉症の前触れなので

意欲に似ています。こうした状態に導いてそれを維持するのは、音頭取りの仕事で、ヒステリーや乃至はんかん性の発作的な振る舞いに由りて、皆のうちに同じ情動を誘発するのです。

じのような内と外の混交、言い換えるなら、自分自身の場所と他人の場所との混交は、あり方こそ違っていますが、分裂病者は、しばしば見受けられます。すでにE・トロイラーが指摘していることですが、分裂病者の場合、内部と外部が区別されていないのです。例えば、分裂病者の前から物を取りゆくと叫び出しますが、これは、当人が傷を負ったからなのです。

また、閉鎖系をなしている——自閉的な欲望のままとしての——大衆ないしは群衆といった意味で集団の概念を捉えるなら、実存を蔑るにすることになります。

何かを患者と共に探す

——病院で活動した学生のうちには、グループを作つて会話を試みた者もいましたが、こうしたグループは、集団を表す「on」——自分本来のものではないですが、おのずから

【著者あとがき】 リリーに脱出したインタビュー記録は、精神科医ジャン-ピエール・クルト(Jean-Pierre Klein)の主宰する季刊誌『芸術と治療(Art et Thérapie)』の求めに応じて、アンリ・マルティネが、二人の弟子、「

ヒューム・シャラザックとジョエル・アーデルリックを聞き手に、自らの思想を直截に語ったところを、後二者が録音し、「対話」の形にまとめたものである。

アンリ・マルティネ(Henri Maltravers)は、一九一二年に生まれ、同世代では最年少で(フランスの)教授資格を取つた。ペギーのかな高等学院の教授を務めた後、リヨン第三大学の教授として、一九八二年に退官するまで哲学、美学、心理学などを講じ、現在では同大学名誉教授となつてゐる。まだ、ルードヴィヒ・シングスヴァルガーの若い友人でもあり、トランヌに現存在分析を導入したのは、リリー・マルティネである。彼の著作には、『Psychose et Présence』(Revue de Méaphysique et de Morale, 81, 4, Oct.-Déc., 1976)等、多くの論文のほか著書がある。

Regard, Parole, Espace, Lausanne, L'Age d'Homme, 1973.

Le legs des choses dans l'œuvre de Francis Ponge, Lausanne, L'Age d'Homme, 1974.

Autres de la langue et dommages de la pensée, Lausanne, L'Age d'Homme, 1975.

Art et Existence, Paris, Klincksieck, 1985.

なお、インタヴューの一人、ピエール・シャラザック(Pierre Charazac)は、現在ヒューム・アンド・ベン病院の一般精神科主任である。また、もう一人のジョエル・トーレルリック(Joel Budlerlique)は、木村敏氏を慕つて日本へ渡り、一九八六年から八年にかけて名古屋市立大学及び京都大学で研究活動をしていた。その後、長らくフランスや本格的な紹介の待たれていた同氏の著作を翻訳し、間もなく刊行の予定である。

目標に収斂して行く仕掛けがあるのです。やはり、ここで本質的なのは自由という点で、

その点からして有効なのは、反復も辛見も不可能な何かがいつでも起こり得るような行為だけなのです。二者関係についても同じことと言えます。一对の男女があらかじめ目標を設定して、固定した生活を送つてゐる場合、彼ら自身、それぞれの人生においても共同の人生においても停滞してしまつてゐるのであります。だから、思いがけないことをしなければなりません。二人の間で絶えず何かを作り出るだけなのです。だから、「[on]」が「nous autres」(「他ならぬ我々」と言えば、間違います。ソリでは「[nous]」「[autres]」という語がどれほど意味深いのか。この語の意味するところは、他人に引き比べての我々、自分を他人から分け隔て、自分に閉じこもる我々ということです。さて、集団の活動が真実、共同体としての活動になるためには、一人一人が個人としてその活動に寄与することが必要です。私が言つてゐるのは、共通の目標に向かって行くことなのです。そのため目標があらかじめ与えられているわけではないのです。これは決定的な点だと思います。これに対して、先ほどからお話している集団の場合には、あらかじめどこに到達するのか、少なくとも感情的には分かっているのです。言うなれば、前もってちゃんと準備、設定された

目標に収斂して行く仕掛けがあるのです。やがて、この状況こそその人に固有のものなのです。というのも、精神病の定義とは、自分に固有のものがないということですから。日常生活もあるわけです。そして、仮に探し当てたとすれば、患者はある状況に目覚めるでしょうが、この状況こそその人に固有のものなのです。というのも、精神病の定義とは、自分に固有のものがないということですから。

ヒューム・シャラザックによる採譯
ジョエル・アーデルリックによる採譯